



息子が悩んでいる。少し剃り残しのある後ろ頭が寂しい。1年間の禅修行で鍛えた心身は、あんなに軽やかだったのに、将来の不安がまた重くのしかかっているようだ。よいことを考える必要がなかった集団修行生活から、いま現実の中で生きていくべきを考えねばならない世界に戻ったのである。

何かアドバイスは、と考えてみるが思いつかない。私が20代の時、悩んでいたことはどうも息子の悩みとは違う。どうしたら寺の跡継ぎの重圧から逃れる

息子の悩み

永田 円了
真国寺住職



ことができるのか、そんなことばかりで悩んでいた青二才だった。

一方息子の悩みは、これからの人生、どう生きていきたいのか、というあまりにも広大で選択肢の多い悩みなのである。果たして彼は答えが出せるのだろうか。

今年40歳を迎えるイチローがインタビューに答えて言った。「バッティングとか技術のこと

は、そんなにたいしたことではない。この人がどうやって人生を生きているのか、が大事なところ」。バッティングの結果よりも、人の生き方を根本的な課題として捉えている姿には感動する。やはり、ぶれない生き方があって初めて結果が伴うものなのか。

「君が何か外側のことです苦しんでいる場合、君を悩ませているのは、そのこと自身ではなく、それについての君の判断なのだ」(16代ローマ皇帝マルクス・アウレリウス)

青春時代の悩みは純粹である。とことん悩もうとする。これからの人生について息子はどう判断をするのだろうか。「楽しくなければ人生じゃない」という判断もある。でもこ

れだと、楽しくなくなれば、人生を放り投げてしまうことになりかねない。一方、使命感に燃え、ストイックに生きるという判断がある。

ストイックとは、「禁欲的」と解されているかもしれないが、それは違う。ストイックに生きるとは、宇宙という生命体の一員として、やるべき事をやる。損得、好き嫌いを超えて、ミッションをやり抜く。自分の置かれた場所で退行せず、隔離せず、否認せず、抑圧もせず、事に凍として立ち向かう。そんな生き方をいう。

ああ、なんとという大いなる生き方。自分にできないことを息子に期待していいのだろうか。なにか自分が彼の中に入り込んで生きようとしているかのようだ。息子にとっては大迷惑なのかもしれないが。

凜とした生き方願う